

自然遊学館 だより

2012 WINTER

No.62



田中紗耶子さんの日本画作品「カワセミ」
現在開催中の特別展「2011年の自然遊学館の出来事」
のために描いていただいた7点の作品のうちの1つです。

2012.1.30 発行 貝塚市立自然遊学館

目次

*ネイチャーレポート

- 千石荘の自然 ……岩崎拓… 1
近木川のアユ ……山田浩二… 5
ナギサズ ……岩崎拓… 6

*行事レポート

- 生き物切り絵製作会Ⅱ ……川村甚吉… 7
化石クリーニング ……川村甚吉… 8
自然を食すⅡ ……川村甚吉… 9

*館長コーナー

- 遊学館に想う ……高橋寛幸… 11

*調査速報

- 千石荘昆虫調査 (2011年10-12月) ……岩崎拓… 14

*泉州生きもの情報

- イボショウジンガニ ……山田浩二… 16
ツキヨタケ 2011 ……岩崎拓… 17

*学芸員実習の感想

- 学芸員実習を終えて ……諸節奈津… 18

*自然生態園コーナー

- ツマアカベッコウ ……岩崎拓… 20
リスアカネ ……岩崎拓… 21

*寄贈標本の紹介

- オシャグジデング (うらぼし科) ……上久保文貴… 23

*スタッフ日誌

- *お知らせ …… 27

ネイチャーレポート

千石荘の自然

1. 里山・里地的景観の重要性

草地、雑木林、畑、水田、ため池、水路などの里山・里地的景観、および照葉樹林的景観が保全されていること、貝塚市内の他の場所では宅地開発や圃場整備によってそれらの景観が失われてきたことに加えて、貝塚市内のほぼ中心部に位置することから（図1）、千石荘の自然は貝塚市にとって貴重なものです。

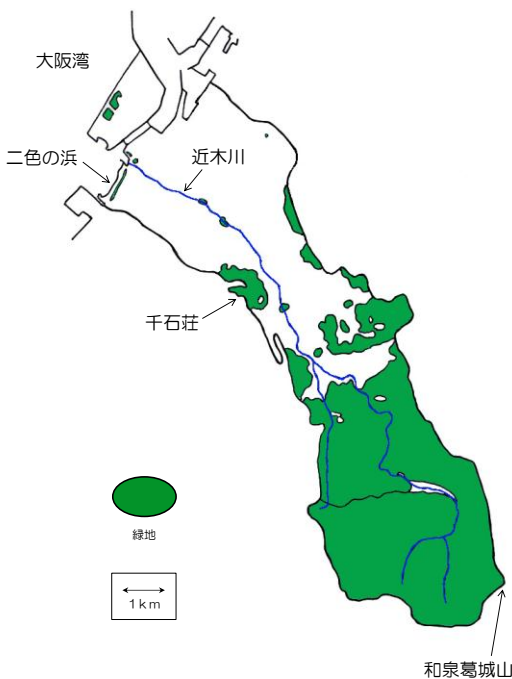


図1. 貝塚市内の緑地（略図）
（2010年3月のGoogle earthの画像より）

同じく貝塚市の丘陵地にある東山や馬場の自然のかなりの部分がすでに失われ、さらに千石荘の自然が失われることになれば、貝塚市の自然は、近木川河口・二色

の浜から和泉葛城山の山麓までの間がスカスカになってしまいます。和泉葛城山の山頂には天然のブナ林がありますが、その山麓は有用林とは言えスギ・ヒノキ植林が大半を占めます。千石荘の里山・里地は、現在の貝塚市にとって和泉葛城山の山頂付近や近木川河口・二色の浜と並ぶ大切な自然・資源・財産と言えます。

2. 千石荘の希少種

千石荘の景観ばかりでなく、それを構成する種の中にも、保全すべき希少種が含まれています。たとえば鳥類ではオオタカ、ミサゴ、ハイタカ、ノスリなどの猛禽類や、クイナやオオバンといった池や水辺にすむ種が継続して確認され、植物ではアンペライ（図2）、タヌキマメ、イヌタヌキモ、昆虫ではネアカヨシヤンマ、マルタンヤンマ、ベニイトトンボ、ナニワトンボ（図3）、ネキトンボ、ヤスマツアメンボ、クルマバタなどが確認されています（表1）。



図2. アンペライが生える牛神池

思われます。昆虫に関しては、自然遊学館の所蔵標本のデータをまとめました。

表1に示した大阪府レッドリスト種ではない動植物の中にも、貴重な種が含まれています。植物に関しては、自然遊学館のこれまでの調査で、貝塚市内において約1,150種の植物が確認され、そのうち千石荘では約300種の生息が確認されています。その中には、ツリガネニンジンやメガルカヤなどの最近少なくなった種が含まれます。また、キハギ、ヒメアブラススキ、ヒカゲノカズラ、コ克蘭などは、山地性でありながら千石荘の丘陵地に生えているという意味で貴重な種（個体群）と言えます。

昆虫では、クマスズムシ、ショウリョウバッタモドキ、サツマヒメカマキリ、オオキンカメモシ、サツマシジミといったやや珍しい種や、カブトムシ、コクワガタ、ヒラタクワガタ（図4）、ゴマダラチョウなどの里山を代表する種（クヌギやコナラなどの樹液に集まる種）が確認されています。



図3. ナニワトンボ

表1. 千石荘で確認されている大阪府レッドリスト種
(貝塚市立自然遊学館作成:2011年10月末まで)

グループ	種名	ランク
哺乳類	カヤネズミ	要注目
鳥類	オオタカ	絶滅危惧Ⅱ類
	クイナ	絶滅危惧Ⅱ類
	オオバン	準絶滅危惧
	カワセミ	準絶滅危惧
	ホオアカ	準絶滅危惧
	カワウ	要注目
	ミサゴ	要注目
	ハイタカ	要注目
	ノスリ	要注目
	ケリ	要注目
	昆虫類	ネアカヨシヤンマ
マルタンヤンマ		絶滅危惧Ⅱ類
ベニイトンボ		準絶滅危惧
ナニワトンボ		準絶滅危惧
ネキトンボ		準絶滅危惧
ヤスマツアメンボ		準絶滅危惧
クルマバッタ		要注目
淡水貝類	ドブガイ	要注目
植物	アンペライ	絶滅危惧Ⅰ類
	タヌキマメ	絶滅危惧Ⅱ類
	イヌタヌキモ	要注目

大阪府レッドリストのランク

- 絶滅危惧Ⅰ類 絶滅の危機に瀕している種
- 絶滅危惧Ⅱ類 絶滅の危機が増大している種
- 準絶滅危惧 存続基盤が脆弱な種
- 要注目 良好な自然環境の指標となる種

(注) 鳥類に関しては、自然遊学館が2005年から千石荘で行ってきた冬のバードウォッチング行事の記録をまとめたもので、上記の種以外にも大阪府レッドリスト種が生息している可能性は高いと



図4. ヒラタクワガタ

1998年の報告書の中で竹本卓哉氏は、「千石荘は平野部に孤立しながらも、現在も安定した生態系をもつ雑木林だと言える。また、ホソバセセリ、オオケンモン、ホソアシナガバチなど低山地から山地性の昆虫相を含むことは特筆すべきことで、千石荘の（現代では）特殊な昆虫分布の解明に尚一層力を注ぐべきである」と記しています。現在、自然遊学館が所蔵する貝塚産昆虫標本約2,700種のうち約500種が千石荘から得られています。

さらに当館の客員講師で2011年に陸産貝類の調査をしていただいた児嶋格先生からは、「千石荘は陸産貝類にとっても丘陵地の生息原型が残されている貴重な場所になっていて、ミジンヤマタニシやカサキビ、オオウエキビ、コシダカシタラなどの微小種や、ウラジロベッコウ、クチマガリマイマイ、オオケマイマイなどの地上棲の貝類の生息密度が非常に高く、そのような場所は貝塚市内では千石荘しかありません」という報告をいただきました(図5)。



図5. 千石荘で陸産貝類の調査をする
児嶋格先生と山田浩二学芸員

3. 千石荘の林の現状

千石荘の林は、コナラやクヌギ、アカマツなどを主体とする二次林（雑木林）と、カクレミノ、ヤブニッケイ、カゴノキ、ヤマモモなどを主体とする常緑広葉樹林から成り立っています。

自然遊学館元館長で植物がご専門の上久保文貴先生の話では、「常緑広葉樹林の方は千石荘の元々の植生 — 海に近い暖地性の照葉樹林 — の名残を留めている」と考えられます。昼もやや暗い常緑広葉樹林の中には、沼と呼べるような場所もあり、人が近寄りやすい雰囲気のある場所もありますが、先ほどの陸産貝類などにとっては棲みやすい場所になっています。そのような自然も大切なのです。

それに対して、二次林の方は自然状態のままに放置されてきたわけではなく、燃料や肥料を得るための薪炭林として人が手を入れることによって維持されてきました。それは植物の遷移を止めることでもあり、そのことによって、そういう環境に適応できる多様な動植物相が維持されてきました。

現在の千石荘の動植物が多様であるのは、人の手が加わらない部分と人の手が加わって維持されてきた部分の両方があるからです。しかし特に1960年代のエネルギー革命以降は、薪炭林としての二次林の重要性が減少し手入れの頻度が減少しました。さらに近年、道路から隔てられるように柵が設けられたことにより踏圧が掛からなくなって植物の遷移が進行し、二次林から常緑広葉樹林への移行が目立ち、さらに下草としてのネザサが繁茂しすぎた

状態になっています。人が見て美しいと感じるコナラやクヌギの二次林の景観、里山・里地の多様な動植物が生息できる明るい林からはやや離れつつある部分が目立ってきました。

4. 千石荘の残したい自然

千石荘の雑木林の中に、カブトムシが集まる樹液の光景がずっとあり続けて欲しいと思います（図6、図7）。千石荘の自然は、将来にわたって重要さを失うことはありません。



図6. 千石荘の雑木林



図7. 樹液にきたカブトムシ

たとえば 2006 年度の昆虫調査の報告では、「樹液の滴るクヌギの木で、カブトムシやゴマダラチョウが吸蜜している光景は、貝塚市の子どもたちに是非とも残しておきたい自然である」と述べられています。草地、雑木林、畑、水田、ため池、水路など様々な環境のうち、特に雑木林の経済的な価値が変わってしまったのです。薪炭林としての重要さが失われた今、昔の利用方法を復活させることは困難です。市民が散策を楽しめる自然公園など現代に合った利用方法を考える必要があります。

さらに千石荘で最も求められているのは、人手を加える自然と加えない自然をどういった割合にして後世に伝えていくかという、より困難な問題です。自然を愛する人の中には、自然を手つかずのままの状態にしておくことを希望する方も多いと思います。雑木林はそういう方にとっては一過性の自然に過ぎないのかもしれませんが、動植物の多様さを旗印にすれば、雑木林と常緑広葉樹林の両方をバランスよく維持していくことが重要になりますが、この多様さという旗印自身の正当性も「科学的根拠を伴った地域住民の意思とでも呼ぶべきもの」でしか保証されません。

千石荘にどのような動植物が生息しているのか、どのような管理をすればどのように増減するのかをモニタリングし、その情報を開示することが、初めの第一歩であることは間違いないのですが、その先はとなると、不法投棄の問題も含めて簡単に事が運ぶということはないように思います。

(岩崎 拓)

近木川のアユ

2011年10月10日、近木川の下流で、複数のアユの生息を確認しました。ここ数年、近隣の男里川下流でアユがたくさん採集されているという情報を、現地で精力的に魚の観察を続ける阪南市の河野通浩さんから頂いていました。そこで、近木川でも生息状況を探ろうということになり、河野さんとともに調査を行いました。

近木川下流に沿った道路から、眼をこらして川を覗くもアユらしき魚が泳いでいるのを確認できませんでした。しかし、河川敷に降り、転石をよく見ると、アユが石に付着した藻類をかじった跡である特有のはみあとがところどころについているのを見つけ、一気に期待が高まりました。アユが隠れていそうな場所に刺し網を仕掛け、追い込んでいくという作業を5回ほど行った時、最初の1匹が掛かり、やはり近木川でもアユが成育していたんだという安堵感のような気持ちになりました。



アユのはみあと

(アユの口は上下のあごに櫛状の歯が生えており、これで石に生える藻類をこすりとって食べる。)

結局、1時間あまりで計3匹を採集することができ、それぞれ全長が20.0cm、18.5cm、18.2cmの立派な成魚のサイズでした。秋はアユの産卵期なので、近木川の下流でも産卵している可能性があります。これらのアユは館に持ち帰り、展示水槽で1週間余り泳いでいましたが、あえなく死んでしまい、所蔵標本となりました。

これまで自然遊学館の調査で採集されたアユは、2005年6月18日に同地、近木川下流での全長12.5cmの若魚1匹のみでしたが(山田、2005)、今回の調査で近木川もアユが成育できる環境であることが裏付けられたと思います。しかし、男里川のように川沿いの道路から、アユの群れ泳ぐ姿が確認できるほど多く生息しているわけではありません。成長に合わせ、川→海→川と移動する回遊魚であるアユが、近木川のどのあたりまで遡上しているのかを含め、今後も生息状況をモニタリングしていきたいと思っています。



近木川産アユ

引用文献

山田浩二(2005)アユ. 自然遊学館だより, No36: 11.

(山田 浩二)

ナギサスズ

一昨年（2010年）の8月27日、ナギサスズ（別名：ウミコオロギ）の仲間を採集するために、市川顕彦さんと平田慎一郎さんと一緒に、貝塚人工島（貝塚市二色南町）に行きました。2007年9月17日と10月7日に逸見茂樹さんが人工島で採集されたウスモンナギサスズが桂孝次郎さん経由で自然遊学館に寄贈されていて、生息を再確認するためです。当日は雨が降った後のコンクリート護岸とテトラポットに多数のウスモンナギサス *Caconemobius takarai* を発見できました。体長は1 cm強で成虫になっても翅は生えません。



ウスモンナギサスズ♀
(2010年8月27日、二色南町)

その際に、市川さんは別の種であるウミコオロギ *C. sazanami* を視認し、大阪府からの初記録として報告されています（市川、2011、ぼったりぎす147号：57-58）。

今回はその採集が目的で、2011年9月25日の夜、市川さん、平田さん、河合正人さん、高田雅彦さんと一緒に、二色南町の

テトラポット護岸にむかいました。どちらの種かはっきり分からないまま、懐中電灯を照らしながらペットボトル製の捕虫器などを使って十数個体を捕獲しました。ナギサスズの仲間はなかなか跳ねないので、他のコオロギ類の採集とは勝手が違います。結局、両方の種を採集でき、自然遊学館の標本分として、ナギサスズを1♂1♀持ち帰りました。



ナギサスズ♀
(2011年9月25日、二色南町)
♀には産卵管があります。

ウスモンナギサスズと比べて翅がない点は共通していますが、やや小型で、ウスモンナギサスズが腹部背面に横長の縞模様が入っているのに対して、ナギサスズは黒色一色です。じっくり見れば見分けることができます。

両種とも本来は、岩石の積み重なった海岸やサンゴ礁の崖に生息しているようですが、人工島のテトラポット護岸という人工的な環境にも適応できるようです。餌は主に波で打ち上げられた魚などの動物死体を食べているのだと思います。翅がないこと、あまり跳ねないことは、いったん飛

び出すと海に落ちて死んでしまう可能性があることと関係があるのだと思います。

このナギサスズの確認で、自然遊学館の記録として、貝塚市のバッタ目が99種になりました。

(岩崎 拓)

行事レポート

生き物切り製作会Ⅱ

日時:2011年10月30日(日)13:30~16:00

場所:自然遊学館多目的室

人数:受講生18人

目的:生き物を切り絵にすることによって観察力を養い、その技術を切り絵表現に生かす。

今回もリピーターが多く、初めて切り絵をする人は3人でした。切り絵を始めてから3回程度の人は4人でした。ほかの人たちはかなりベテラン域に達しています。

初めての方たちには「イシダイ」、「カメ」、「カニ」を、経験の浅い人たちには「ナミアゲハ」、「サギソウ」などに挑戦しました。



初めての作品

ベテラン勢には2コース用意していました。一つは「ネジバナ」もう一つは「カキとメジロ」です。ご存知の通り、ネジバナは花がねじれているように表現しなければなりません。台紙に土色を使い、ネジバナ全体を切り、裏から花の赤をねじりながら埋めていき、最後に裏全体にのりをスプレーしてオリーブ色を貼り付けると出来上がりです。



製作風景

もう一つのカキとメジロはたくさんカキがなっている木の枝に5羽のメジロがそれぞれの表情をしている構図です。白と黒のみの表現ですので、こちらは色を間違えることはありません。しかし、細かい表情などがあり、切るには大変難しいところがあります。

全員すばらしい作品が出来上がりました。今回も額などを私の方でプレゼントし、合評会をして終わりました。

(川村 甚吉)

化石クリーニング

日時：2011年11月6日(日)11:00～14:30

場所：自然遊学館多目的室

参加者：27人

指導講師：蕎原箱谷考古学研究会

加藤 守 先生

高田 雅彦 先生

当日は前日からの予想で「雨」になる確率が大変高かったのですが、どのような形にするのか、検討を重ねました。結果、講師の加藤先生から雨でもできる自然遊学館の多目的室はどうかとの考えを示され、そのように実施することになりました。急遽、当選受講生に連絡です。

本来、「化石採集」として実施するはずでしたが諸事情が重なり標題の行事に変更したのでした。その学習場所が化石採集地であったのにその雰囲気も感じられず残念な展開になりました。

しかし、加藤先生たちが長年の作業の中で得られた貴重な化石を参加者一人ひとりに提供されたのでした。自然採集物であるだけに大きさや質などにばらつきがありましたが、どれをとってもすばらしいものでした。しかも、化石の種類はナノナビス(二枚貝)に統一されていました。

この化石が生物として闊歩していた頃

(6,500～16,400 万年前)の様子を高田先生が話されました。その後、クリーニングの実際的なやり方と留意点について加藤先生が説明され、いよいよ実習です。加藤先生が全般的な質問をされ、高田先生が各グループに入り込んでの立体的な指導です。



作業風景

荒く削り取られていた化石はその本来の姿を見せ始めました。力を入れない釘うち方法は時間がかかるけれど着実にクリーニングされます。鉄ワイヤブラシを使って縦筋をさらっていきますとくっきりと放射肋(「ろく」貝の縦の線)が現れてきます。そんな作業と結果の感激を味わいながら小休止となりました。床の上に座っての作業なのに、休憩をとらず黙々と作業している人がたくさんいました。



加藤先生

自然遊学館は飲食は基本的に禁止していますので、弁当等を取ることはできません。従いまして、11時から14時半まで「飲まず食わず」状態でしたが、熱心に励んでおられました。

参加者は化石クリーニングを学んだ満足感でいっぱいでした。その上に子どもたちにはジャンケン・ゲームで全員に化石を頂きました。大人にも全員で1つ貴重な巻貝の化石をプレゼントされました。

(川村 甚吉)

自然を食すⅡ

日時:2011年11月27日(日)12:00~14:30

場所:自然遊学館多目的室

参加者:21人(事前申込による)

目標:秋の恵みを食材にして食し、自然に親しむ

講師:国家調理師資格保有

栗山 昭 先生

準備物:

食材 ムカゴ6カップ、米16カップ、ヤマノイモ1kg、紅葉の葉30枚、ハコベ30本、アサツキ60本、アジ15匹、ドングリの粉1kg、ホットケーキミックス4袋、柿の葉茶100g、卵6個

調味料等 ミソ200g、ダシ80g、テンプラ油1.5L、小麦1kg、薄口醤油、塩、料理酒、牛乳1L

器具 炊飯器3台、カセット・コンロ5台、フライパン6、鍋大1、ボール5、茶瓶大1、布巾6、紙皿大10、菜箸1、ペーパータオル、オタマ5、泡立て器4、かえし4、

ペットボトル6、油入れ4、カセットガス10、茶袋1、白布4枚

メニュー:

- ・ ムカゴご飯
- ・ すりおろしたヤマノイモ入りの味噌汁
- ・ テンプラ
モミジの葉、ハコベ、アサツキ、サツマイモ、アジ
- ・ ドングリケーキ(実習)

メニューと準備物を見るだけでも準備が大変でした。ドングリは採集して、何回も洗い、陰干しします。乾燥後一つ一つカナヅチでたたき、表皮を取り、中の実を取り出し、灰汁抜きと、渋皮を取る作業をします。それを再び陰干しして、製粉機で粉にして、ドングリケーキの準備は終了ですが、約1ヶ月を要しました。

テンプラ材料はその前日が準備時間の限界です。前日の午後、奥地の畑周辺で採集したものや、漁港へ出向いて購入した魚を用意しました。今年はモミジになる時期が遅く、色合いは若干鮮やかさに欠けました。

ムカゴは1ヶ月以上毎日妻が奥地の田畑周辺の天然ヤマノイモのツルから採集して貯蔵していました。

ヤマノイモは3日前に山で掘りました。美味しいヤマノイモは、腐葉土などのない赤土の層から掘り出されたものが最高です。3日前に深山で掘り出しました。

いよいよメニューの料理作りです。12時の食事時刻にぴったりするように栗山先生は作業を進めていかれます。ご飯の水加

減、ダシの量、テンプラの準備と実際に揚げていかれるその妙技を横目で見ながら、私も時間に間に合うように作業していきました。



メニュー

21人の参加者全員が出席です。小さい子どもたちの参加する本館の催しで欠席者がいないのは本当に少ないのですが、今回は全員参加です。いきなり、食べるところから始まりました。

食後、挨拶の後、栗山先生から、食材や、料理法について説明していただきました。その後、ドングリケーキを焼きながら試食していきました。



レシピの説明を聞く



ドングリケーキを焼く



出来上がりのケーキ

最後に、私の方で、秋の実り、自然の食べ物について話しました。質問コーナーもたくさんあり、食すことと学ぶことを同時に満たすことができたことを実感しました。

お土産に、「干し柿」と竹串を渡し、「二個、二個(ニコニコ)と中六つ(睦)まじく暮らしましょう」と配置するように説明しました。さて、その干し柿は成功しているでしょうか。

(川村 甚吉)

館長コーナー

遊学館に思う

初めに

前回の 61 号は、遊学館の春から秋の出来事でした。少し思い出してみてください。前号 61 号最後の締めくくりの文章より『9 月、満月の頃、夏の暑さが一段落すると、秋の虫の声が大きくなり、・・・・略・・・・。これから遊学館の周りも秋の本番を迎えやがて冬支度に入ります・・・・略・・・・。次回は秋から春の出来事をお知らせします。どんなことが・・・・・・』

今回は 9 月後半からの報告になります。どんな出来事があったでしょうか？

自然遊学館 2011 年の出来事展

本題に入る前に、話は少し道を外れますが、遊学館特別展として、遊学館の 2011 年の出来事を開催しています。期間は 3 月 25 日までです。是非一度来館ください。会場の様子を紹介します。



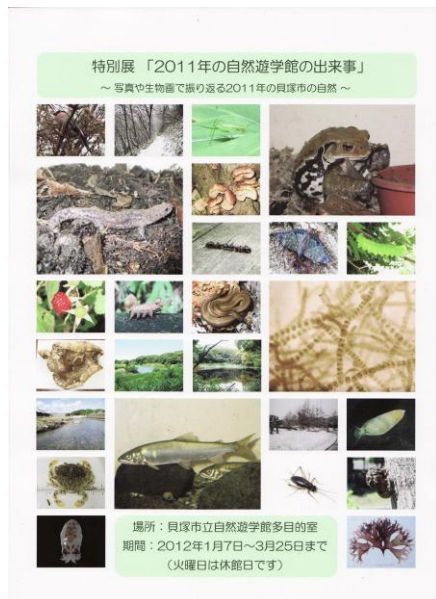
会場内の様子 2



会場内の様子 3



会場内の様子 1



ポスター

遊学館の秋から冬の出来事

9月後半

台風15号接近

今年は大きな台風が近畿を襲いました。9月21日には台風15号が昼過ぎに近畿地方に再接近。自然生態園のトンボの池の水かさもほぼ満水状態になりました。



トンボの池の橋近くに迫る水面
9月21日午前9時39分

黒いひまわりの種

木積に住む方から、黒いひまわりの種が採れた、との連絡がありました。通常の色茶色の種をから育てたにもかかわらず、黒い種ができたことから不思議に思い遊学館に持ち込まれました。珍しいことだったので、調べてみると、特に黒い種はロシアやメキシコ、ヨーロッパの地中海沿いの国、南アフリカなどで油含有量が多いことから、ひまわり油として生産されていることを知りました。また、秋田市では黒い種を採り次の年に引き継ぐ、というフラワーリレー事業を行っている小学校もあるようです。



9月25日に持ち込まれたひまわりの種
9月29日撮影

10月

アユが近木川に

10月中旬、近木川河口から少し上流に上ったところで、アユを捕獲しました。20cmを超えるアユで、十数匹は目撃されたようです。過去の近木川発見のアユでは最大級になります。1週間ほど遊学館水槽で泳ぎ、来館者に元気な姿を見せていました。



近木川のアユ 10月10日撮影

狸目撃

二色4丁目の住民の方から、近くに狸がいる、との通報があり、現地に確認に行きました。現場に行くと、電柱近くの排水路の中から、脱毛著しく、痩せた狸が出てきました。よく見ると耳や顔にひっかき傷が多数ありました。観察のためさらに近づく

と、家の植え込みから、庭に逃げ込み、見失ってしまいました。

その後も、二色町での目撃情報があり、遊学館職員も隣の空き地で目撃しました。外傷があることから、いくつかの他の機関に問い合わせ、対処をいろいろ考えましたが、捕獲し、元いた場所に返すにも場所が特定できないことや、特に人に害を及ぼす動物でもないということから、そのまま様子を見ることにしました。



**狸目撃情報のあった空き地方向からの遊学館遠景
10月20日撮影**

この頃、公園内に蜂が多数飛んでいると目撃情報があり、職員が大型網を持って現地に駆けつけたこともありました。このとき、人への被害は報告されませんでした。

11月

化石クリーニング（例年は化石採集として実施）

「諸事情から、12月に現地は封鎖されず。従って、11月の化石採集はできなくなりました。」9月末に突然入ったニュースでした。遊学館の目玉行事の一つで、今年は

もちろん来年以降存続が不可能となった訳です。しかし、「何とかして今年限りでも行事を行えないか？」と現地の採集責任者の方と話し合い、最後の化石行事が行われました。行事の参加募集は化石採集から化石クリーニングに変えました。例年の通り多くの参加希望がありました。化石採集ができなくなるため、蕎原・箱谷古生物研究会の好意により化石が提供されました。当日は悪天候にも関わらず、参加者は遊学館の多目的室で熱心に磨き上げていました。11月はもう一つの遊学館の人気行事、『自然を食すⅡ』が開催されました。この行事は人気があり、ホームページに募集が出ると、すぐに定員になってしまいました。

12月

大型水槽入れ替え

11月末から12月にかけて遊学館の大型水槽が入れ替わりました。中流水槽と海水水槽の二つが新しくなりました。新しい水槽で泳ぐ魚たちは元気になったように見えました。これも、遊学館にとって大変重要な出来事でした。

雨天中止の行事

源流探検が雨天中止となりました。2011年、雨で中止になった行事は、春のハイキング、二色浜海浜植物調べ、秋のハイキング、源流探検でした。参加希望していただいた方々にはご迷惑をおかけしました。

これからの行事

2月には『二色浜の打ち上げ貝拾い』『千石荘・二色浜のバードウォッチング』が予

定されています。そして3月には『自然を食すⅢ』があります。それぞれの行事に多くの皆様が参加し、満足していただけることを願っています。

最後に

貝塚市立自然遊学館は平成5年10月にオープンし、平成24年、今年で19年目を迎えます。来年の平成25年の10月が遊学館の20周年、(人でいうと成人)誕生月になります。円熟期を迎えるに当たり、貝塚の自然を多くの人に伝えられるよう、館内展示や行事を充実させていきたいと思っています。応援よろしく申し上げます。

(高橋 寛幸)

調査速報

千石荘昆虫調査 (2011年10-12月)

2011年10月11日

水田の一部では稲刈りが始まり、草むらではススキの穂が美しく、秋も半ばにさしかかりました。外来種ではありますがセイタカアワダチソウの黄色い花も馴染みの風景になったような気がします。そこにはツマグロキンバエ、ホソヒラタアブ、キンケハラナガツチバチなどがたくさん集まっています。

セミはツクツクボウシだけが少し鳴いていました。鳴く虫の主役は完全にコオロギとキリギリスの仲間に移りました。しかも秋が深まるにつれて昼間から鳴くようになります。美声のカンタンもクズの葉の

破れた場所から頭を出し、翅を立てて鳴いています(図1)。たまたまいた場所ではなくて、こういう場所で鳴いていることが多々あります。カンタンを含めてバッタ目は16種確認され、全体の種数の約3分の1を占めました。



図1. カンタンのオス成虫

チョウ類は9種確認され、成虫で越冬するクロコノマチョウもすでに成虫が出現していましたが、まだ幼虫でいるものもいました(図2)。一度覚えると忘れられない顔をしています。

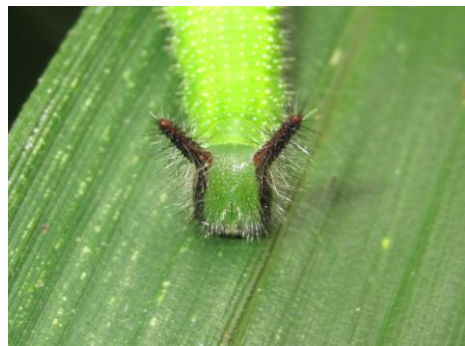


図2. クロコノマチョウの幼虫

2011年11月9日

稲刈りがすでに終わっていました。稲刈りは水田周辺にすむ昆虫たちにとっても

一大イベントで、草刈り後の水田脇の草むらは、オオヨコバイ、アカスジカスミカメやイネホソミドリカスミカメといったカメムシ目や種名が分からない小さなハエでいっぱいになります。

バッタ目は7種となり、先月から種数が半減しました。それでもクサヒバリの澄んだ鳴き声が樹上から響いてきます。耳を澄ますと「響き渡る」という表現の方が的を得ているようです。

トンボ目ではアキアカネを確認しました(図3)。全国的に減っているとされるアキアカネですが、千石荘では見ることができます。稲刈り後の水田の水たまりに産卵するのですが、当日もそのような水たまりをいくつか見かけました。



図3. アキアカネ

雑木林のケヤキの樹幹に生えたハカワラタケというキノコから、何やら細長い物体が多数出ていました(図4)。館に持ち帰って裂いて中身を見ると、黒色のガの幼虫がいました。この細長い物体は「ミノ」(可携巢)だったわけです。ミノの材料はエノキの樹肌とキノコが混じっています。



図4. ガのミノ

おそらく菌食者でミノを作るガの幼虫ですが、そんなものは聞いたことがありませんでした。当館顧問の保田淑郎先生に尋ねると、「ミノをつくるガの仲間は多岐に渡る」と言われました。

2011年12月1日

ここ数年で最も暖かい11月だったせいか、春に咲くはずのホトケノザが咲いていました(図5)。本日の正午の気温は14℃と、先月の平均気温とほぼ同じで、あまり冬を感じません。



図5. ホトケノザ開花

それでも昆虫は先月と比べてかなり減りました。チン・チン・チン・・・というカナタタキの澄んだ鳴き声だけが聞こえ

てきます。クヌギの樹洞にいたオス成虫の写真を撮ることができました (図6)。



図6. カネタタキのオス成虫

賑わいをみせているのは稲刈り後の水田脇の一部の草むらだけで、種名が分かる中では、ウンモンミドリカスミカメが特に多くいました。水田脇の草むらのカスミカメの主演は、先月のアカスジカスミカメから交代したようです。



図7. ヒゲナガヤチバエ

図7は冬の草むらでおなじみのヒゲナガヤチバエです。普通種ながら写真がなかったもので、白いバットの上で撮影しました。このまま成虫で冬を越します。幼虫はというと水生で、水田や水路に棲み、モノアラガイ類などの淡水貝類を食べます。

今年の4月から千石荘で昆虫調査を再開しました。2005年と2006年には月に3回の割合で調査しましたが、今回は月に1回しか行けず、昆虫相の調査としては失格でしょう。報告書を書くときも少々気が重いです。

(岩崎 拓)

泉州生きもの情報

イボショウジンガニ

2011年10月20日、二色の浜海浜緑地の船降ろしスロープで海水を汲んでいると、岸壁に1匹のイボショウジンガニがしがみついているのを見つけ、タモ網で採集しました。オスの個体で甲幅は28.2mmでした。また、それから三日後の10月23日、貝塚市立第四中学校3年生の奥田大介さんが二色の浜の突堤で採集し、当館に持って来てくれた1匹のカニも本種でした。この個体はオスで甲幅は34.8mmでした。



イボショウジンガニ

♂ 甲幅 34.8mm

貝塚市二色の浜 2011年10月23日

このカニは、房総半島以南の外洋性岩礁海岸で見られるほか、流木などの漂流物につかまって生活しています。貝塚市沿岸ではこれまでに記録がないと思われ、偶然この2個体が南方からの漂流物に付いてやって来たものか興味深いです。

また、最近、イボショウジンガニに形態がよく似た、別種のカニが和歌山県日置川町で採集され、日本新記録としてツブイボショウジンガニの和名がつけられ報告されました(武田・今原、2011)。今回の貝塚産の2個体についても、この文献に基づき形態を精査してみましたが、イボショウジンガニに同定されました。

なお、これら2個体は70%エチルアルコール浸標本として保管しました。

引用文献

武田正倫・今原幸光 (2011) 日本新記録のツブイボショウジンガニ (新称). 南紀生物, 53 (2) : 115-118.

(山田 浩二)

ツキヨタケ 2011

2011年10月26日、食野俊男さん、鈴子勝也さんと和泉葛城山山頂に鳥類の定期調査に行った時の事です。登山道Aコース脇のブナの倒木に旨そうなキノコがたくさん生えているのを見つけました。大きいものは大人の手の平ぐらいの大きさです。

調査を終えて、遊学館に持ち帰り、図鑑で調べると、有名な毒キノコであるツキヨタケと分かりました。別のブナの立ち枯れ

に生えていたものもツキヨタケの幼菌であることが分かりました。



ツキヨタケ (ブナの倒木)



ツキヨタケ幼菌 (ブナの立ち枯れ)
笑った口のように見えますね!

タイトルに2011とあるのは、2004年11月3日も同所のブナの立ち枯れにツキヨタケを見つけていたからです。その時は立ち枯れに図鑑そっくりの生え方をされていて、しかも傘の色も図鑑そっくりだったので。ところが今回は、ブナの倒木の下面から生えていて、傘が開いてからやや時間が経ち傘の色がうすくなり、しかも前日の雨でふくれていたのです。それでツキヨタケとすぐに思い至りませんでした。キノコの同定の難しさは、生え方の変幻自在さにあると痛感しました。

その他、ツキヨタケが生えていたブナの倒木には、クチキトサカタケ、チシオタケ、チャシワウロコタケ、ニガクリタケ、アラゲコベニチャワンタケが生えていました。



アラゲコベニチャワンタケ（ブナの倒木）



クチキトサカタケ（ブナの倒木）

クチキトサカタケは3年連続で、同じ倒木で見つけています。すぐそばの大きな落枝からはアカチシオタケも生えていました。ブナの倒木は、倒れてからもこういったキノコたちに生息場所を与えて続けてやがて土に戻っていくのでしょうか。

（岩崎 拓）

学芸員実習生の感想

「学芸員実習を終えて」

10月13日から10日間、自然遊学館でお世話になりました。諸節と申します。岸和田在住で館までは自転車で20分くらいでしょうか。現在、東京にある『科学技術館』というところでインストラクターとして勤務しています。科学技術館は建物が大きく、多い日には3千人の団体の小学生で溢れかえります。最も多く口にする言葉は「走らないで〜!」でしょうか。ハンズ・オンと呼ばれる展示方法がとられており、とりあえず触って動かさなければいけないため、大人も子どもも値段の安いテーマパークだと思っています。自分の職場で学芸員実習を受けることも可能でしたが、他館に行った方が自らのためになると思い、こちらで勉強させていただくことになりました。

さて、私の専門は実は科学でも生物でもありません。どちらかというとな文系で高校は府立の芸能文化科というところに通っていました。数学も理科もまったくできません。遊学館で学んだ中で衝撃的だった事は「クローバーとシロツメクサが同じで、カタバミをクローバーだと思い込んでいた」ということと、「一枚貝（傘貝）をよく見るとカタツムリみたいな奴がいる」ということでした。これにはさすがに担当の方々も呆れかえったと思います。いくら文系とはいえ、ヤバイ奴が来た……と。他の実習生の方は最後に貝塚の自然について研究発表を行われていますが、残念ながら

ら私はワークシートを作成させていただくことにしました。現在の自分の仕事場での体験を生かし、出来ることをさせていただいた訳です。

さて、私の職場と遊学館を比べたときにどちらがよいかというのは全くわかりません。インストラクターの仕事はフロアに出て接客をしているだけだからです。実際館の中で何が行われているのかはわかりませんし、部署別になっており、遊学館の方々のように全ての仕事をしているわけではないからです。とはいえ、遊学館では接客・研究・事務処理など全ての仕事をしなければなりません。今まで私はどんなに忙しくても接客だけは怠ってはいけなと思って勤務してきました。しかし、ここではその接客に時間を割くことが難しいのです。にもかかわらず、タヌキを見つけたよ！と報告に来てくれる住民の方々や、学校に行くことは難しいけれど、館に遊びに来てくれる子どもに出会い、来館者と館との絶妙な距離があるのではないかと感じました。この館の最大の魅力は地域密着型ということです。動物を見つけたら遊学館に持って行く、ちょっと散歩がてら行ってみる、水曜と土日は電気が遅くまでついていてなんだかホッとする、一見些細なような出来事が、この貝塚に館がなくてはならない存在になった何よりの証拠ではないでしょうか。大きな博物館で働いていると毎日が流れ作業です。何百人という子どもたちが帰ったと思ったら、また次の団体が来る。実習中、外で水槽を洗っていると「人間はやっぱり太陽の光を浴びなきゃなあ。」と感じました。小学生の特別授業

で近木川に行き、海水をくみに海に連れて行ってもらった時に、いったい自分はいつから海や川に行っていないのだろうと悲しくなりました。暑い・寒い・季節など当たり前のことを感じることができました。そんなのん気に貝塚の自然を感じる事ができたのは、もちろん館のみなさまのおかげです。文系で社会人、通信大学に所属しており、自分の希望する時期に実習に行きたいという私にチャンスを与えていただきました。先ほど述べたように、仕事が多いのにもかかわらず随時学生を受け入れていただくというのは精神的にも時間的にもかなりの負担だと思います。

実習に関しては大きな館のほうが間違いなく余裕はあるはずですが、多くの学生を受け入れる館の方針に感動しました。この館の暖かい雰囲気というのはお昼の時間にも現れています。男所帯なのにもかかわらず、かならずお昼は全員そろってお弁当をひろげることに驚きました。だいたいどこでも仕事のキリのいいところで各自お昼をとると思うのですが、ここではみんなそろっていただきますをします。一人でゆっくり食べたいときもあるに違いないのですが、素敵だなと思いました。



下水道フェスティバルで司会を行う

最後になりましたが、個人的な希望としては少し無理をしていただいでフロアの来館者との触れ合いをさらに多くしていただければと思います。事務所に「〇〇さんいてるかー？」と来るような方ばかりだとよいのですが、ほとんどの方が質問したいけどできない、見学してもいいのかな？とシャイな方が多いと思います。そしてそのような方はクレームをつけることもなく二度と訪れることはないからです。やはり来館者のご意見というのは館の展示を今後どのようにしていくのかということも含め非常に重要ではないかな、と思います。なじみの方はもちろん、初めていらっしゃる方にもやさしい博物館になるよう期待しております。とはいえ、地域の方々と絶妙な関係をお持ちの館なので現状のままがベストなのかもしれません。

10日間ほんとうにありがとうございました。改めて自分がこどもたちと触れ合うことが好きだということに気づくことができた10日間でもあり、自然と向き合えた10日間でした。

(科学技術館 諸節 奈津)

自然生態園コーナー

ツマアカベッコウ

2011年10月8日、自然生態園「ドングリの森」の石積みの上で、腹部の先が赤いベッコウバチを見つけました。石積み隙間に巣を作っているところでした。

これまではトンボの池の石積みで時々見かけていたのですが、捕虫網を持っていない時ばかりだったので採集できませんでした。

今回は、生態園作業日の昼休みで、荒木陽介君とバッタの原っぱでバッタ調べをした後だったので捕虫網があり、撮影した後に採集することができました。見当どおりに、ツマアカベッコウでした。

和名については、「南西諸島産有剣ハチ・アリ類検索図説」(山根ほか、1999、北海道大学図書刊行会)によると、ツマアカコブベッコウ(改称)と書いてあります。アシダカゲモ類を狩り、本州、四国、九州の南岸から南西諸島を経て東南アジア、南アジアに広く分布するそうです。また例えば、「神奈川県昆虫誌」(神奈川県昆虫談話会、2004)には、「戦後いつのまにか本土でも記録されるようになり、現在では神奈川県では南部を中心にかなり普通。産地の北進はまだ続いているようで、・・・」と書かれています。



ツマアカベッコウ

ツマアカベッコウの追加によって、自然遊学館が所蔵している貝塚市産ベッコウ

バチ科は種名が判明している分で5種から6種に増えました（ベッコウバチ、オオモンクロベッコウ、スギハラベッコウ、フタスジベッコウ、ヤドリベッコウがこれまでの5種です）。

（岩崎 拓）

リスアカネ

リスアカネの成虫は、翅の先に褐色の帯があるのが特徴です。このような翅の先が色付きのものに、ノシメトンボとコノシメトンボがいて、胸部側面の黒条のパターンで見分けないとはいけません。下の写真は2011年11月12日の自然生態園作業の日に、「トンボの池」で撮影したものです。



リスアカネのオス成虫

これまでトンボの池で行われてきた定期調査では、2002年6月8日に幼虫が確認されていて、同年の夏に2個体成虫が確認されています。今回は少なくともオス成虫3匹、メス成虫1匹を確認できました。オス成虫どうしは、トンボの池でなわばり争いをしていて、1匹のオス成虫の翅はぼろ

ぼろでした。

リスアカネはやや閉鎖的な池を好みます。トンボの池も完成後14年が経過し、周りの樹木が成長したため、リスアカネが好む部分が出来てきたのかもしれませんが。

作業を終えて遊学館に引き上げる時、水辺から5mは離れたススキの根元で、リスアカネのメス成虫がホバリングしながら打空産卵しているのを見つけました。完全に「水気のない」草むらに卵をせっせと産み落としているのです。その10~20cm離れた場所では、オス成虫が同じくホバリングしながら産卵中のメス成虫をガードしていました。まさしく見張りといった感じでした。

アカネ（アカトンボ）の仲間は卵で越冬します。草むらに産み落とされた卵は、雨で乾燥を免れたとしても、春になって泳げる水の中でふ化する可能性はありません。トンボの池は埋立地の公園内につくられたビオトープで、岸の形がほぼ決まっています（これが自然の池なら、春に雨が降って水位が上がって水面が広がり、草むらに産まれた卵から水中にふ化する可能性も考えられます）。せっかくリスアカネのオスとメスがトンボの池に来てくれたのに残念です。せめてトンボの池にも卵を産み落としてくれていることを祈るだけです。

（岩崎 拓）

◆ 寄贈標本の紹介

以下の方々より標本を寄贈していただきました。お礼申し上げます。

(※2011年12月分まで)

< 鉱物 >

◆ 山出央輔さんより

方解石 (に硫砒鉄鉱が混じったもの)
1点

貝塚市二色 2011年11月2日採集

◆ 石田龍馬さんより

方解石 1点

貝塚市二色 2011年11月2日採集

< 植物 >

◆ 川口博さんより

クヌギのどんぐり 多数

貝塚市二色 2011年10月30日採集

(展示用に集めていただきました)

◆ 中村進さんより

ツクバネガシ 1点

貝塚市秋山川 2011年12月7日採集

◆ 濱谷巖さんより

イタドリ 1点

ヤマアジサイ 1点

オトコエシ 1点

葛城谷 1949年10月2日採集

ヘラオモダカ 1点

高城谷 1948年8月20日採集

ヌルデ (ヌルデミミフシ) 1点

貝塚市柎谷 1948年8月20日採集

トラノオシダ 1点

貝塚市奥水間 1949年12月29日採集

テイショウソウ 2点

クジャクシダ 1点

アリノトウグサ 1点

和泉葛城山 1948年8月15日採集

シラヤマギク 1点

和泉葛城山山頂 1948年8月15日採集

ヨモギ (ヨモギハシロケタマフシ) 1点

和泉葛城山 1953年8月8日採集

オシャグジデンド 1点

和泉葛城山山頂 1949年12月29日採集



濱谷巖氏寄贈のオシャグジデンド標本とラベル

その他、貝塚市以外が産地の植物および虫えいの標本も多数寄贈していただきました。これらの標本の同定に関しては、上久保文貴氏および中村進氏に協力をしていただきました。ありがとうございました。以下、上久保文貴氏からオシャグジデンドについていただいたコメントを紹介しませう。

オシャグジデングダ *Polypodium fauriei*
(ウラボシ科)

和名は、濁点つづきの言いにくい奇妙な名前ですが、牧野植物図鑑によると信州木曾地方の「お社貢寺」(シャグジ)というお寺の森で発見され、命名されたということです。(デングダはシダの古名)

深い山地のブナやトチノキなどの、大木の幹や大きな岩などに着生する小形のシダです。根茎は太さ4mmほどで樹幹や岩などに張り付くように伸び、毎年秋には長さ20cmほどの新しい葉を出し、ブナやトチノキなどの落葉樹が葉を落とす冬から春の間にしっかり日光を受け、成長し養分を蓄え繁殖ための孢子もつけて落葉樹が葉を展開する初夏のころには葉は枯れてしまい、真夏のころには根茎だけが残り休眠期にはいります(冬緑性)。この生活スタイルはオシャグジデングダのような小さなシダが、深い森の中で生き延びるための巧みな戦略かも知れません。

葉は乾くと表面を内にして、ぜんまい状に丸く巻く性質があり、乾燥標本にしても丸く曲がった標本になります。オシャグジデングダが乾燥から身を守るための性質かも知れません。

分布域は広く日本では北海道から九州まで分布しますが、個体数は少ない所も多く茨城、埼玉、山梨、和歌山、香川、福岡、佐賀、大分、鹿児島などの各県では、絶滅危惧種に指定されています。大阪府では金剛山、箕面、樫田(高槻市北部)、和泉葛城山などで古くから分布が確認されています(大阪府植物目録 桑島 1966)が、

金剛山では道沿いのトチノキの大木の幹の高い所などで今も見られ、箕面でも大きな岩に着生したのが見られます。和泉葛城山では、最近の確認情報はなく、2009年度から行われている自然遊学館の和泉葛城山植物調査でも発見されていません。残念ながら今のところ現状は不明です。

今回、濱谷巖先生よりご寄贈いただいたオシャグジデングダの標本は、1949年12月に和泉葛城山頂付近で採集されたものですが、63年間、保存状態もよく根、茎、葉、孢子もついたしっかりした標本で、戦後の混乱期の数少ない標本としても貝塚市にとっては大変貴重な標本です。

(上久保 文貴)

<哺乳類>

- ◆杉野重明さんより
イノシシ 下顎1点
和歌山県岩出市 2011年11月採集

<鳥類>

- ◆府立少年自然の家より
コサメビタキ 死体1点
貝塚市木積 2011年10月1日採集
- ◆長見心・富田明歩さんより
スズメ 死体1点
貝塚市二色 2011年11月30日採集

<爬虫類>

- ◆千地芳樹さんより
尾が2本のカナヘビ 生体1点
岸和田市中井町 2011年10月29日採集

◆匿名希望さんより

ヤモリ 生体1点

貝塚市清見 2011年11月30日採集

<魚類>

◆藪下哲也さんより

ツバメコノシロ 1点

大津川河口 2011年10月3日採集

<甲殻類>

◆和田太一さんより

マメアカイソガニ 2点

洲本市成ヶ島 2011年10月1日採集

◆藪下哲也さんより

シマイシガニ 1点

大阪市南港沖 2011年10月3日採集

◆田中博さんより

ベンケイガニ 1点

岬町小島 2011年10月10日採集

(田中学さん採集)

◆奥田大介さんより

イボショウジンガニ 1点

貝塚市二色の浜 2011年10月23日採集

◆田口悠衣さんより

ユビナガホンヤドカリ 3点

貝塚市二色の浜 2011年10月24日採集

◆村上桃香さん、高辻真衣さん、

南勝樹さんより

ケフサイソガニ 11点

ユビナガホンヤドカリ 6点

オサガニ 1点

近木川河口 2011年10月24日採集

◆渡辺怜真さんより

アシナガスジエビ 1点

イシガニ 2点

貝塚市二色運河 2011年11月14日採集

<昆虫>

◆川崎勇さんより

ミンミンゼミ 成虫(死体)1点

貝塚市二色 2011年9月20日採集

◆渡辺久和さんより

ヒメカマキリ 成虫1点

(ハリガネムシ1個体が脱出)

奈良県五條市 2011年10月3日採集

◆武本正さんより

クロメンガタスズメ 幼虫3点

貝塚市脇浜 2011年10月5日採集

(うち1個体は11月19日に羽化)

◆土原かずよさんより

クマバチ 成虫1点

貝塚市清見 2011年10月上旬採集

◆食野俊男さんより

ヒグラシ 羽化殻1点

和泉葛城山山頂 2011年10月26日採集

◆五藤武史さんより

ハマベアワフキ 成虫1点

貝塚市二色 2011年10月27日採集

◆高木正俊さんより

ウスタビガ 成虫1点

貝塚市二色 2011年11月21日採集

◆濱谷巖さんより

シラホシトリバ 成虫1点

岸和田市別所町 2011年11月11日採集

◆森本静子さんより

トガリアメンボ 幼虫3点・成虫5点

ヨモギハムシ 成虫1点

ホタルトビケラ属の一種 幼虫1点

貝塚市馬場 2011年11月23日採集

オオヤマトンボ 幼虫2点

貝塚市馬場 2011年12月15日採集

- ◆江本大地さんより
ケラ 成虫 1点
オオカマキリ 卵囊 1点
貝塚市馬場 2011年11月23日採集
- ◆石井翔生愛さんより
ケラ 成虫 1点
貝塚市馬場 2011年11月23日採集
- ◆喜多理恵さんより
マユタテアカネ 成虫 1点
貝塚市馬場 2011年12月15日採集

スタッフ日誌

10月15日、予定していた秋の東手川ハイキングが雨で中止になりました。10月3日の下見の際には、昆虫、へビ、花や実をつけた植物が昨年より少なく、寒くなるのが早いせいかなと思いました(11月には再び暑い日が続きましたが)。



セトウチホトトギスの花
(2011年10月3日、東手川にて撮影)

そんな中、写真のセトウチホトトギス(大阪府レッドリスト、要注目種)だけは、一昨年や昨年に比べてかなり花が増えてとても目立っていました。(湯・岩)

10月22日、貝塚人工島にある中部処理場(南大阪湾岸流域下水道)が主催する下水道フェスティバルに協力させていただきました。「生きもの大好き〇×クイズ」で、海の生きものや人工島の昆虫について9問出題しました。正解者への景品はパワーストーンです。当日は、科学技術館(東京)在職の諸節奈津さんが学芸員実習の期間中で、司会を頼みました。ふだんの仕事の延長とばかりの名司会ぶりで、会場を大いに盛り上げてもらいました。ありがとうございました。(山・岩)

11月16日、川村先生、高橋館長と、近木川源流探検行事の下見に行きました。コースを舐めていて、ひもがゆるんだリュックに重い荷物を入れていたため、坂で動けなくなるハプニングもありました。12月3日に予定していた行事自体は雨で中止になりましたが、下見の際に川村先生が見つけたコガタブチサンショウウオ2匹は現在も飼育中です。



コガタブチサンショウウオ
(2011年11月16日、本谷にて採集)

源流域の冷涼な環境に少しでも似せるために、低温の上流水槽に飼育ケースごと

入れて飼育しています。お越しの際には、ぜひご覧ください。(岩)

12月19日、2011年5月に受け入れた陸前高田市立博物館の被災昆虫標本のうち、破損度が高かったチョウ類標本を展翅板からはずす作業を行いました。5月の作業と同じく大阪市立生き生き地球館の中谷憲一さんに助太刀していただき、7ヶ月ぶりに標本箱5箱に標本が戻りました。中谷さんの細かな技術がなければ、ここまで復旧できなかったと思います。ありがとうございました。



泥を落とした標本ラベルの中には、字が薄れているものがあります。今のうちに貴重なデータを記録にとどめ、陸前高田市にお返しする予定です。(岩)

12月21日、馬場たわわの小池では毎秋、自然遊学館わくわくクラブが池さらえの行事をしています。2010年は植えたハスから小さなレンコンが収穫でき、食べてみると意外に旨かったので、今年も少し期待していました。ただ夏あたりからハスが生え

ていないという情報もあり心配していました。それで11月23日の行事当日、やはりハスはなくレンコンもまったく収穫できませんでした。その代わりと言っては何ですが、アメリカザリガニがうじゃうじゃ採れました。その日には採り尽くせなくて、12月15日にも再度、池さらえを行い、両日で赤黒い成熟個体80匹、小型のものも含めて合計1,000匹以上を採集しました。すべて自然遊学館で飼育し、レンコンを与えると、いつもの餌よりも旨そうに貪り食ったので、レンコン食い尽くしの「犯人」がほぼ分かった次第です。(岩)



レンコンにかじりついたまま後ずさりする
アメリカザリガニ
(2011年12月21日、自然遊学館にて撮影)

12月25日、今年も生きものの世話に明け暮れた一年でした。珍しい生きものやタコの幼生などを世話させてもらいました。印象に残っているのは、職場体験の子どもたちに生きものの世話のしかたなどを体験してもらえたことです。来年も世話をがんばりますので、ご見学の程、よろしく願います。(鈴)

12月26日、七草摘みの行事の下見に行きました。小雪がちらちら舞い寒いのですが、蕎原周辺を歩くのは、いつ行っても気持ちがいい。

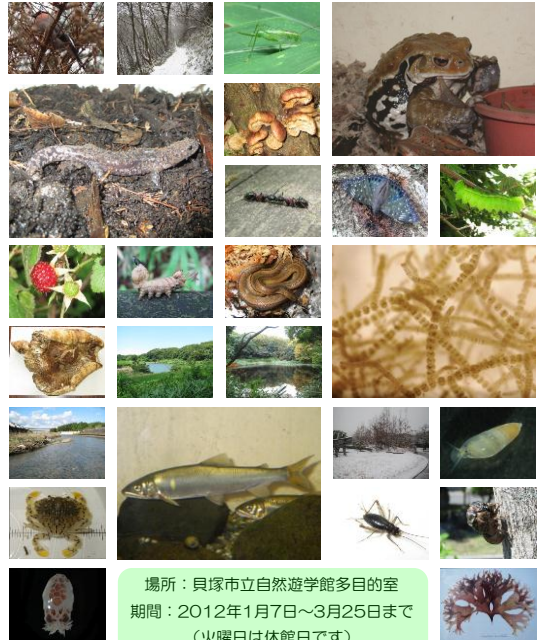
毎年、ほの字の里で七草粥を作っていたので、その打ち合わせをしました。今年も快く引き受けてくださいました。ほの字の里から坂道を降りた所には、ほの字の里の管理されている田があります。ここでは、セリ、ナズナ、ハハコグサ、ハコベ、コオニタビラコの5種全てみられました。

もう少し先に行くと、ハコベ、セリなどが見付き、例年どおり田んぼにはコオニタビラコのロゼットが沢山ありました。フユイチゴも実をつけていて6日には、もう少し色づいているでしょう。雪が降らないように。(湯)

自然遊学館が記録した出来事を、写真や生物画で振り返ります。当年に学芸員実習をされた田中紗耶子さんが描いた生物画も展示します。ぜひ足をお運びください。

特別展 「2011年の自然遊学館の出来事」

～写真や生物画で振り返る2011年の貝塚市の自然～



場所：貝塚市立自然遊学館多目的室
 期間：2012年1月7日～3月25日まで
 (火曜日は休館日です)

 お知らせ

特別展示

「自然遊学館の2011年の出来事」

場所：自然遊学館多目的室

期間：2012年1月7日～3月25日

(火曜日は休館日です)

カワモズク、マダコの赤ちゃん、ヒキガエルの脱皮、近木川河口のアユ、キンセンガニ、ジャンボマツタケ、・・・などなど、2011年も貝塚の自然に関して、話題は尽きませんでした。近木川河口・二色の浜、千石荘や和泉葛城山での調査でも、新たな知見が得られました。そのような2011年に

* 自然遊学館だよりのバックナンバーは、下記のホームページよりご覧いただけます。

自然遊学館だより 2012 冬号 (No. 62)

貝塚市立自然遊学館

〒597-0091

大阪府貝塚市二色3丁目26-1

Tel. 072 (431) 8457

Fax. 072 (431) 8458

E-mail: shizen@city.kaizuka.lg.jp

<http://www.city.kaizuka.lg.jp/shizen/>

発行日 2012.1.31

この小冊子は庁内印刷で作成しています。